

事例研究報告

**特別支援学校高等部生徒の活動
時に離席や逸脱行動をする生徒に
対する効果的な支援方法について**

生徒の実態

- ・高等部生徒 知的障がい 自閉症
- ・発達年齢: 2歳7か月

【行動面】

- ・体育館等, 広い部屋でクルクル回る・寝転がる・うつぶせになる。

【人間関係】

- ・教員との手遊びや音楽, スキンシップを好み手をつないだり肩を組んだりする。自分の意思や要求が通らない時, 好きな活動時に興奮した時, 手を噛んで訴える。
- ・要求カード(手帳型)を首にかけて使用。自分の意思にあったカードを選択し, どの教員にも提示可能。
- ・スケジュールで確認して移動はできるが, 教員が付き添っていないと校舎外に出てしまい危険を伴うことがある。

【好きなこと】

- ・iPadで動画を見たりなぞりソフトやゲームを楽しむことができる。

教員の考え

「活動途中の逸脱をなくしたい」

「1人でできる活動を増やしたい」



アドバイザーからの助言

- 1 生徒の座席をパーテーションで仕切り、逸脱を無くしましょう。
- 2 順番待ちの際の待ちグッズを能動的な内容に変えましょう。
- 3 活動の距離を短く、あるいは教具を少なくしてみましょう。
- 4 活動のUターン(コーン設置)する先にパーテーションを置きましょう。
- 5 寝転がった際には、触れずに座席に戻すようにしましょう。



指導目標の見直し

- ・パートスケジュールに沿って活動することができる。

【標的行動】

- ①順番を守って一人で活動する。
- ②活動後、自席に戻ることができる。
- ③活動時に、自席で順番を待つことができる。

指導1: 1人で活動に参加するための支援

- (1) 座席をプレイルームの隅にしパーテーションで仕切った。活動の際のみ出てくる指示をするようにした。
- (2) 待ちグッズをipadのみにした。
- (3) ミニハードルの個数を2本にした, モップがけの距離を半分にした等。
- (4) 各活動のUターン先にパーテーションを置くようにした。
- (5) 寝転がった際は「着席カード」・ipadを見せて, 自分で座席に戻るまで待つようにした。

記録方法と記録

- 指導目標①②

$$\text{できた(戻れた)割合} = \frac{\text{できた回数}}{\text{総活動数}} \times 100$$

- 指導目標③

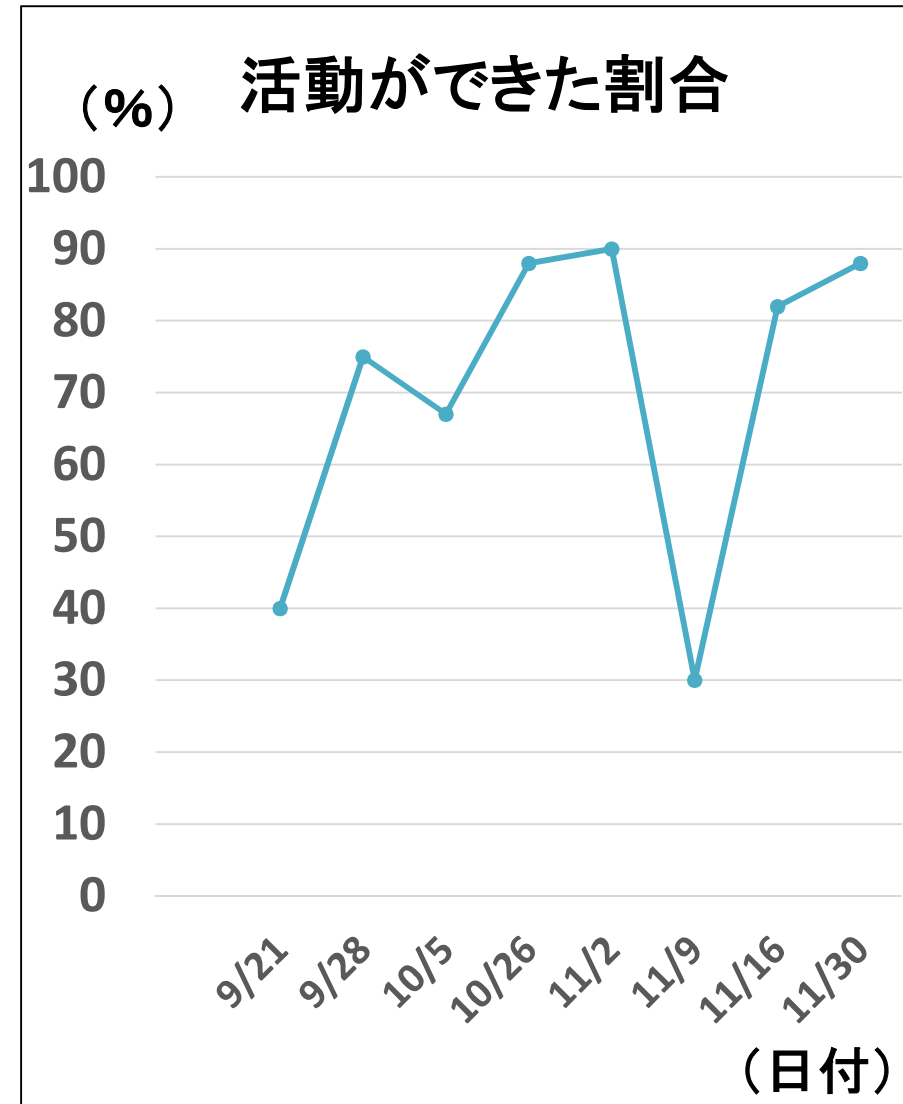
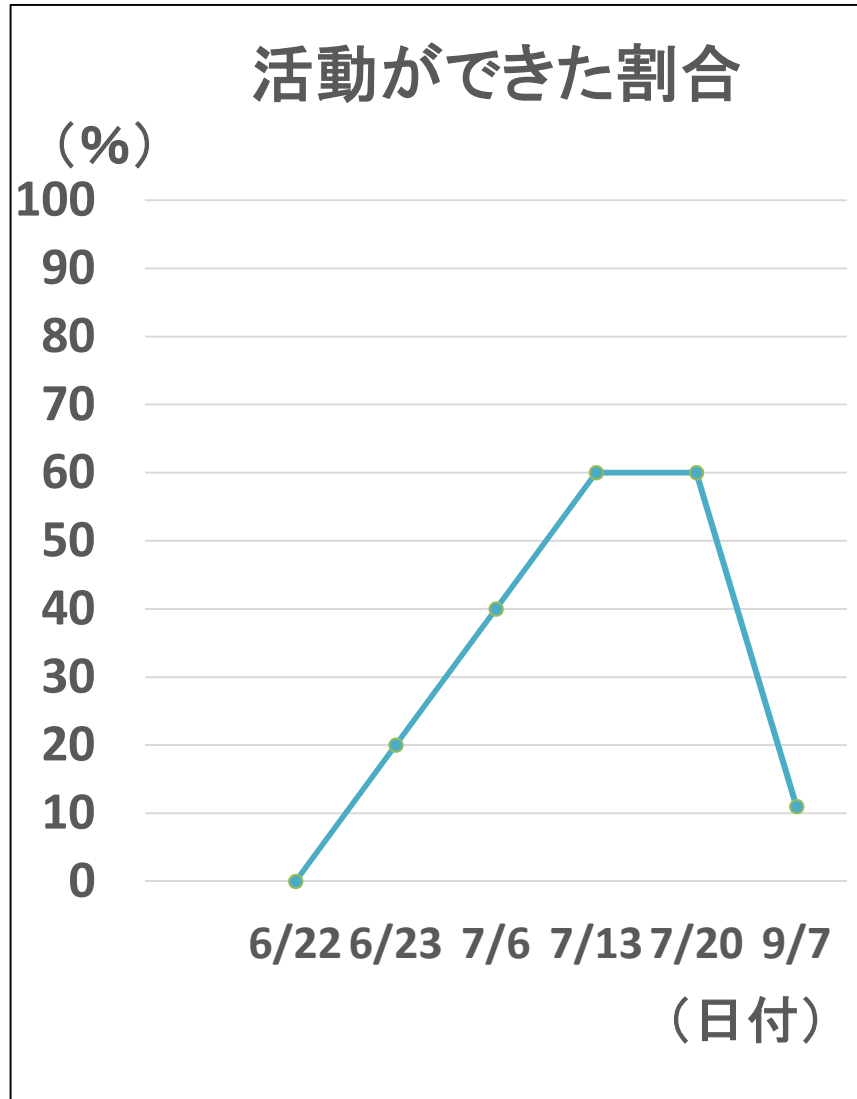
順番を待っている間に離席した回数を記録

指導の成果(指導目標①)

パーティションをすることで、活動途中での逸脱がなくなりました。

【コンサルテーション実施前】

【コンサルテーション実施後】

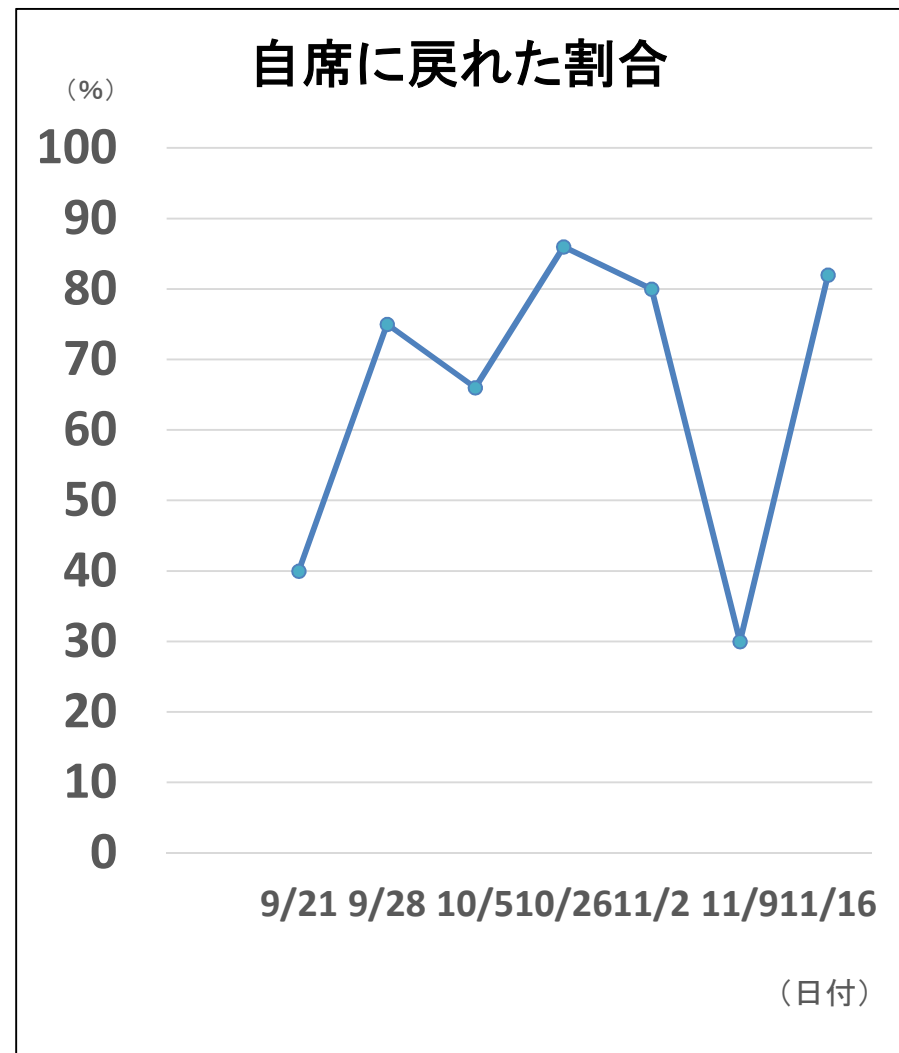
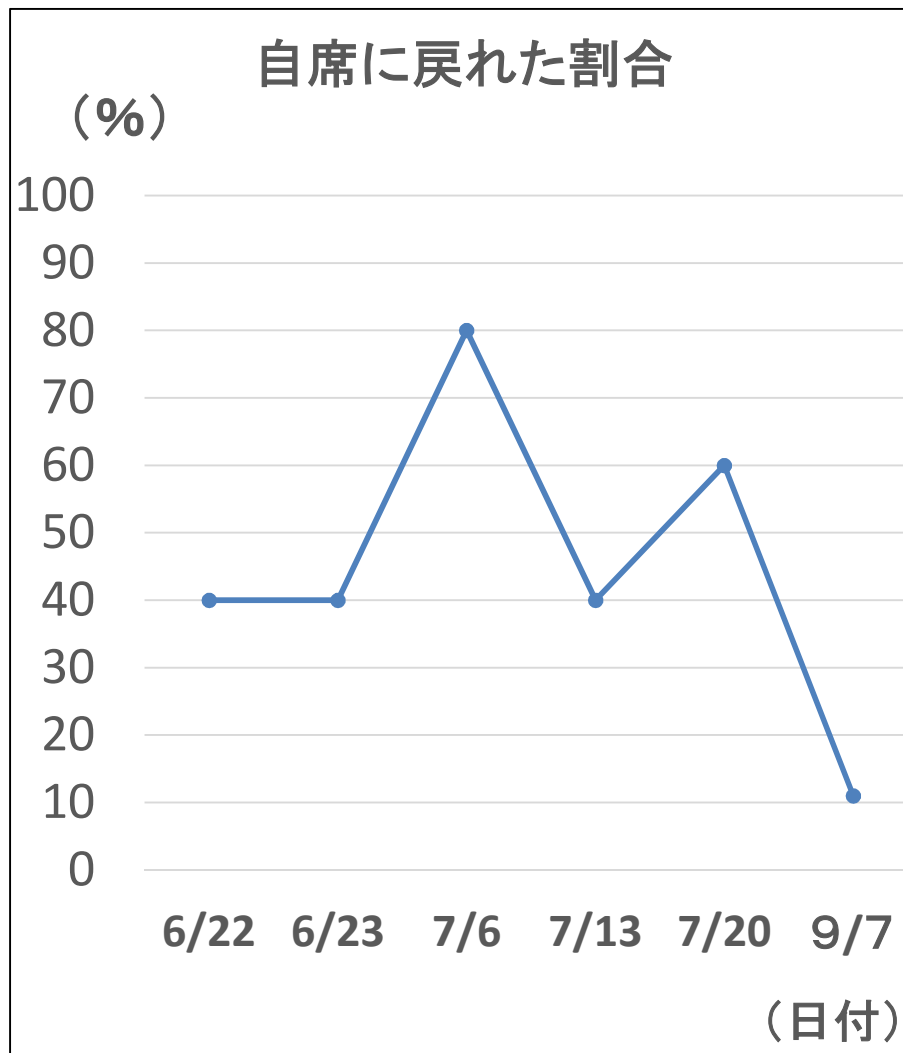


指導の成果(指導目標②)

活動中、つかず離れずの距離感(1m位横或いは後ろにいる)を保つと、スムーズに活動して自席にもどれることが多かったです。

【コンサルテーション実施前】

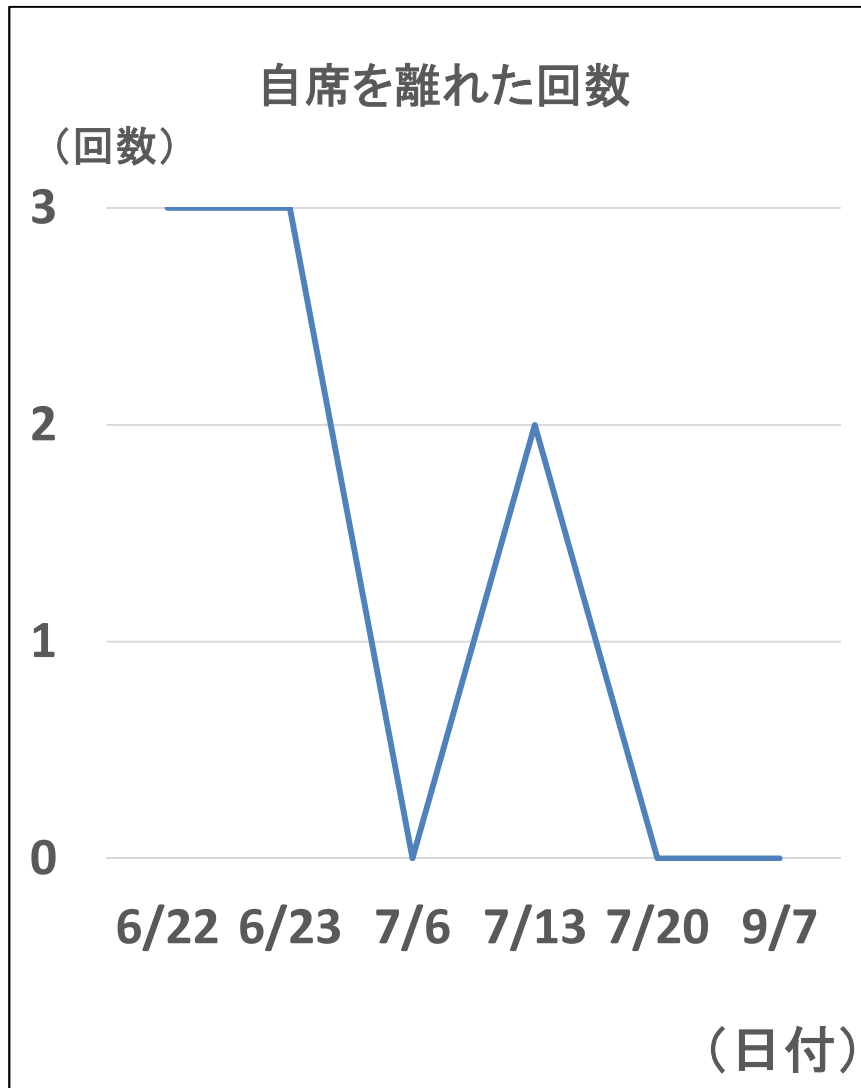
【コンサルテーション実施後】



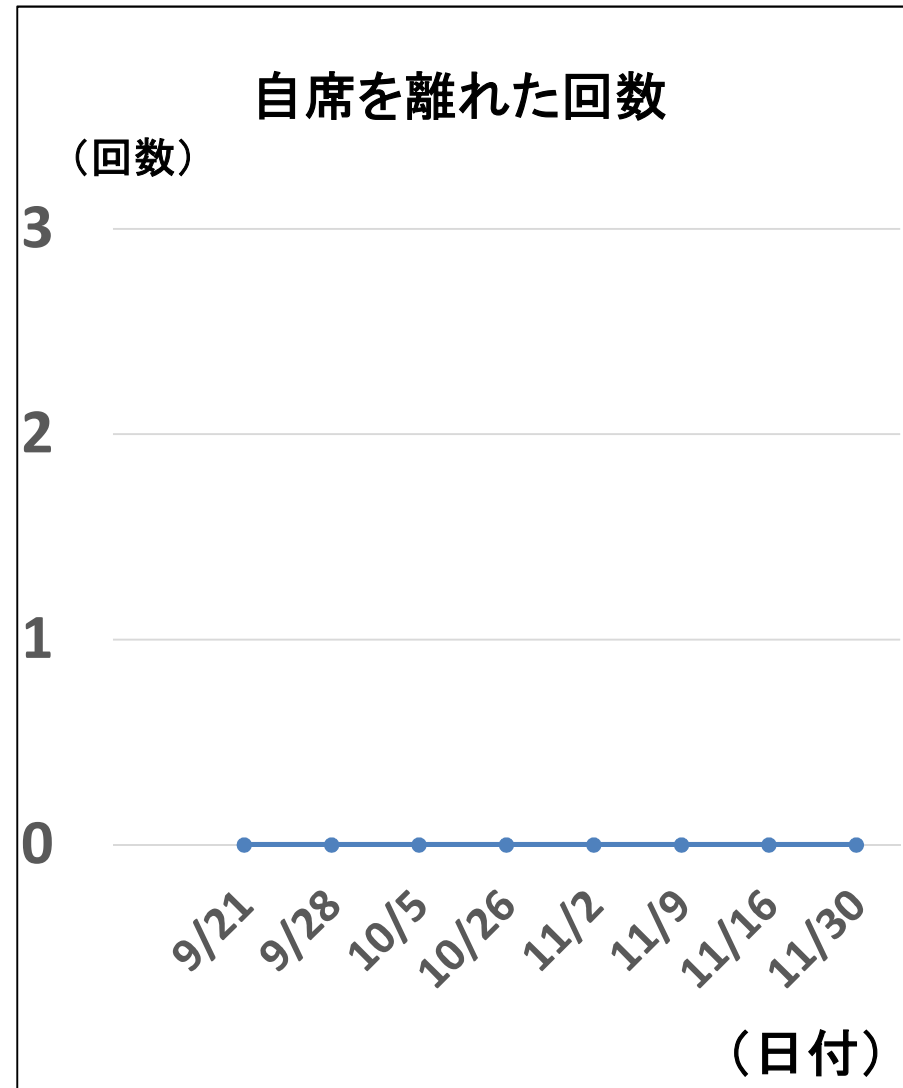
指導の成果（指導目標③）

順番待ちでの座席からの逸脱が無くなったり，座席から立ち上がったりすることが無くなりました。

【コンサルテーション実施前】



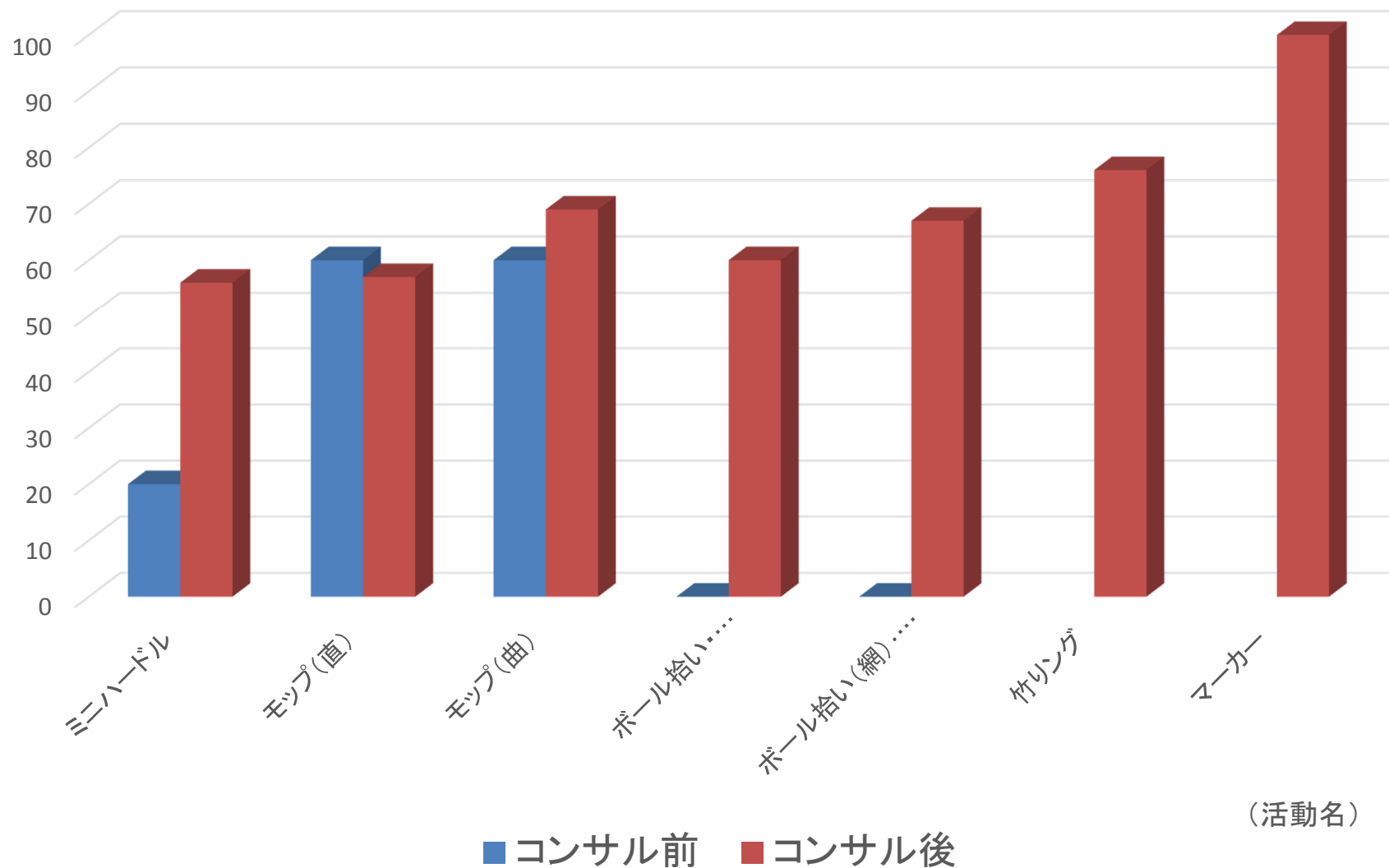
【コンサルテーション実施後】



指導の成果(指導目標①②)

(%)

各活動が一人でできた割合



(活動名)

ここが成功のポイント



- 待ちグッズを能動的なものにしたことで、感情の起伏がなくなり、活動への切り替えやグッズで過ごす時間の終了がスムーズになってきた。
- Uターン先にパーテーションを置くことで、逸脱できる空間が無くなったことが視覚的にわかりやすくなった。
- 教員の対応方法を統一することができた。